

家庭に於ける趣味の涵養

(其二)

川口孫治郎

第三節 服装の事

猿にも衣装といふ諺があつて、服装の如何によつて人の外觀は一ト目には如何様にも映するものであるから、年頃の女子供などが美しい装束をしたがるのは無理もないことである。實は人間の誰でも、美しいことを好まぬものは決してない、唯其美しいとする標準が違ふまでのことである。親としても其兒女に着飾らしめたいのは尤もな人情である。殊に大都會などでは、少しは無理算段をしても飾りたて、かく方が却て大經濟であるかのやうなこともあるさうだから、飾り得る人は飾つても他人から別に苦情はあるまい。

其他、新前の辯護士だとか、世間並みの醫師だとか、ありふれた相場師だとか、ペイ／＼の銀行員だとか、此外、多数の俗人相手の人氣商賣などをするものなどには、體裁といふことが營業上の資

本でもあらうから、玄關も大きく構へ、召使も多人數雇ひ、流行らなくてもはやつて居るかの如く、暇であつても忙はしげにする必要あるやうに、服装などは殊に立派にする必要があるだらう。

併し一般人士にありては、何事にも身分相應といふことが大切で、服装に於ても亦然うである。矢鱈に贅澤を極めたからこそ美しいと限つたものでもあるまじく、伊達の薄着も厚着と同様に趣深いといふわけでもあるまじく、江戸兒の殊更に裏表を違へたのも街ひ過ぎて趣味の上乗とはいひがたかるべく、中老で小兒のやうなのを着くも、男で女のやうなのを着くも、女で男のやうなのを装ふも、うちしめつた場所に華やかに装ふことも、相應したわけではあるまい。全體、相應といふ標準は極めてボンヤリしたもの、やうであるが、併し大凡その標準は言辭に簡單にいひつくせぬ中にドウヤラ確に在る。そこが即ち各人の健全な趣味の働くべき範圍である。

根本要件としては丈夫と清潔との二つである。從來、趣味などを口にする人の中には往々華奢を街

つていろ／＼装ふて得意がるものもあつたやうであるが、それが必しも健全な趣味が働いて居るとはいへぬ。晴着と常着との別に従つて多少の用心をしなければならぬでもあらうが大體右の二條件を根本として前述の如く身分年齢季節場所等に相應するやうといふ標準に照し合した上にも、尙ほ其模様なり縞柄なりさては裁縫なりに、趣味の働くべきところが十分ある。殊に『着コナシ』とか、用ひこなしとかいふことが、言文に發表し易からぬ間にあつて、それが即ち趣味の作用して居るところであるのである。毎年十二月に入つてから市中を連れ立つて歩いて居る新兵諸君が如何にも新兵らしく妙に人目を引く。四月に入つてからは當分、地方から出て來た男女學生なども歴々眼にたつて映する。勿論、新兵の着衣は必ずしも嚴密に寸尺に合はして調製したものではなく、既製品中の着古したものの、中から寸尺の合ひさうなのを給せられたせいでもあらうが、併し古兵だつてさう嚴密に合はして着て居るわけではない。さうに寧ろ舊い多少褪せたのを着て居る古參兵が落付よく

見えて、新兵が恰も節句に祭らるる粗末な雛のやうな外觀を呈して居る。地方出たての學生殊に女性性のそれなどの服装は、花の都に遊學するのだからとて寧ろ贅澤すぎたハイカットのを着けて居るさうだとこの事であるが、併し何處かに落付かない否調和しないやうな所ろがある。斯の如きは固より其新兵新學生の心氣の落付かぬせいなるは勿論なれど、第一着コナシがよくない、着物を着たのではなくて、着物に着られて居る。人が歩くのではなくて、着物が人を連れて居るやうな嫌があるからである。否、新兵、新來學生ばかりではあるまい。所謂ハイカラーといはるゝに殊に多い。流行の事。之は別に論ずるつもりであるが、世には極めて狹義に解して、服装の上の變遷を促すハヤリのみと認めしものさへあるやうである。此意味の流行といふものは或意味からいへば輕薄極まるもので、猫の睛のやうに移り變つて繰り返して居るものである。夫故に靜觀して居れば大體流行の趨くところがわかるものであるから、徒らに保守に拘泥せず又妄に所謂流行に驅役せられずし

て、十分に趣味の満足を得らるゝ、又さういふやうに趣味を涵養することが趣味あることであらう。

胭脂の事。無下に濃厚な赤や紫で眼を張つて脅しつけたやうな装飾をして彌が上にも白粉を鍍塗りにすることは、田舎の年若い女性の間で流行したことを聞いて居つたが、都も都も大都の其中に今も此種の鍍派が随分あるとの事だが、色の黒いのが氣になつて夜の目も合はぬやうな薄ツペラな方々であつて、大に塗る必要ありと自認したものは、女性は勿論男性でも塗つて、眼も鼻も埋めんばかりに粘りつけて白壁の間に意外に眼の丸二つばかりパチ／＼させるのが大によろしい、その上それが少しむら消え崩れば清少納言ならぬ他の傍觀者にも一入眼だつて、世の爲に、健全な趣味涵養の一種の根本となつて、面白からうとも思へる。御常人に對しては誠に御苦勞なことで氣の毒に思へるけれど、御満足のことだらうから誰も禮をいはなくともよからう。

第四節 家居の事

人は其心懸の如何によつて、外界の大抵の事情を如何様にも利用し活用し支配して行けるものである。されど十分にそこまで徹底せぬ多數のものは知らず／＼の間に外界の事情の爲に制せられ左右せらるゝものである。否、人間といふ生類では、如何ほど進歩し如何ほど徹底したからとて、全然外界の事情に制せられぬほどに脱却することは出来ぬ。人と家居との關係にも其消息は確にある。所謂、居移氣といふのはそれである。

其一 四隣の事

里は仁を美しとす選んで仁に居らずば安ぞ知を得む、といふ古聖の訓は誠に其通りである。孟母三遷之教も斯かる主旨から施されたのであらう。選擇遷移の出来ない事情の下に在るものは、自己の保護せる幼弱者に對して、四隣の影響感化に格段なる注意を拂つてやらねばならぬ。成らば漸次に四隣を感化する覺悟がありたいものである。

其二、敷地の事

土地の高燥なること空氣の流通よきこと、此二條件には必ずしも萬人の求めて得らるべき者では

なからうが、其一條件次にでもはまるやうに心懸くべきであつて、殊に新たに敷地を設定するものなどは十分に考慮をめぐらすべきである。

其三、家の大きさ

家屋の構造は、各人の資力と直接に關係し、殊に自我の念の大小に少からぬ關係を有し、延びて國勢とも少からぬ關係を有して居るやうである。學者哲人の中には全く居住の大小など念頭に浮ばないものもあるが、大多數の人々には、矢張り自我の大なる者は概して家屋も大きい。それが總計になつて家並みの大きい國は大抵強國である。朝鮮人中には稀に多少の貯蓄があつても汚吏の誅求を恐れて他の多くの其日暮らしと相率ゐて豚小屋のやうな矮屋に起居し一人で占有すべき空氣の容積は極めて僅少である。運河を開き長城を築きし昔は暫くいはす今の支那人といへども比較的に大きな家屋に居住して居る。歐米諸強國になると假令何階目を借りたる者にも一人で占有すべき氣量は概して前兩者に比して遙に多い。建築の精粗により外氣流通の多少により補充交代の行は

る、等差もあらひなれど概して多い。
右は氣宇が豁達で實力あつて抱負の大なる者が自づと家居までも其影をうつしたのであると同時に、科學的の智識が人の健康を進め少くとも損せざらしめむ爲に漸次に擴大して來たものであらう。我邦にても、學校官廳會社工場などの建築物は最少極限平均一人一時間の所要氣量九十一立方尺の見積を要するが如き規定になつて居るが、之は自我の擴張から來つたといふよりは寧ろ實際の必要から起つたのである。少くとも此位は一般にありたい。

其四、間取の事

家庭に於ては、從來間取に就いて左程顧みられなかつた。勿論他の事情が許さなかつたでもあらうが、事情が差支なき場合にも考が深く間取の問題に及ばなかつたやうである。我邦にても、東北地方の家は暗いけれども間取りが家の割合に大きい、之は寒中一家團欒の爲の必要から來たのであらう。西南地方の家は明るくて間取りも家の割合に大きい、之は暑中可成空氣の流通をよからしめん

爲から來つたのであらう。中部地方でも農家の如きは仕事の性質上延いて間取りが如何にも不締りに出來て居る。名古屋には古來名工が居るとのことなれど、それは主として技術の上のことであつて一般の間取りに變つたところがない。京都は流石に都人の住ひしところとて間取りには多少苦心せしやうにも見ゆる、小さい方で概して間ひ、たれこめて春の行方も知らぬ間に、などいふ所謂京都的要求から由來したのであらう。

慾をいへば、八つの小さな京都的の間取り、又は四つの大きな北東又は九州的の間取りなどよりは、一つ又は二つの大きな間に四つ又は五つの小さな間を添えるやうな方針の間取りの方が、何處にも實際生活上にも衛生上にも其他いろく見地からにも便利であり望ましくあるであらう。

家庭の不規律不衛生其他一切の不締りなどいふことは、思ひの外にも此間取りの如何に由來して居ることが少くない。

裁判官や獄吏や罪人心理學者などの談話や報告などによれば、下流社會の殊に大都會の下流社會の

間には居室の爲に衛生上其他に倅ましき弊風を動もすれば起したり又起しさうな事實があるといつてである。斯かる事柄を考ふれば社會的見地からでも家の間取りに今後随分注意をしなくてはなるまいと思ふ。

其五、裝飾の事、

イ 屋内の裝飾。家庭に於ける年少者の趣味の涵養の爲には、先づ臺所寢室居室などを整頓し、似合はしき清新の裝飾をしてやる必要である。ならば自からせしむることが一層望ましい。其他一切の家具器什は概ね家人の趣味の現れなると同時に涵養の資料となるものなることを忘れてはならぬ。客室に至つては、其造作なり裝置なり之に添へる額面掛物花瓶置物其他火鉢煙草盆茶器などに至るまで、皆應分に趣味の働かすべきところで、傾がて幼年者の不知不識の間に趣味を涵養する資料たるものである。

玄関裝飾の如きも其銜はざる間に却て清新の趣きを籠むることが出來やうと思へる。醫師が輿望

を恢復せんとするや殊更に玄關を飾り家人の履物までをも並べて患者の受診に来るものゝ多きを装ひ、商賈が左前となり始むるや業務擴張と號して殊更に開口大なるところに移轉して虚勢を張り、景品と稱へ割引と名けて盛に顧客を引付けんとするが如き、此等は掛引上動もすれば一種の變調より所謂山が當ることありとのことなれど、確に一種の滑稽劇にして、健全なる趣味あるものゝ所爲に非ず、又其同情をも賞讃をも惹くものでない。

ロ 屋外の裝飾。白木造り茅葺きの家に、硝子窓を開けたのは、煉化造りの家に萩の柴戸を添へたのと共に、まだ日本人の眼には落付かない。所謂つぎ／＼しくは映じない。つぎ／＼しくはないものは健全な趣味の現れとはいへない。庭園殊に植込みは純然たる裝飾にして、趣味の十分に働かざるところである。其他、籬塙柵など一方に實用上の顧慮を要すると同時に家の裝飾として趣味の働くべきところ

であらう。其塙邊籬外、或は近く或は遠く樹木流水平野丘陵

山嶽を、巧に展望し觀賞し得るやう、建設なり改築なりに之れ亦趣味の働かざるところであらう。

物質的文明の裏には、屋敷外の風致どころでない、憐れむべき仕業が屋敷内にさへ往々現れて来る。彼茅屋の數百年前より唯一の目標であつた雲突くばかりの檜の樺が昨日伐り僵された、船材として法外に高く賣れたと非常に喜んで居るとの語。此祠の幾百坪を蔽つて居つた幾抱えの樟の樹が今日賣約濟になつた、明日からは鋭き鑿に根ごし幹ごし掘り伐りとられん筈、樟腦の需要が多くなつたから素敵に上直に捌けたのだと大層うれしがつて居るとのこと。併し之が爲に最早、小禽も來鳴かない、微風も囁かない、鬱たる樹蔭に儼然として暢神することも出来ない、森然として一種の威嚴に觸るゝよすがもない、誠に精が抜けたやうな光景になつたなどと心ある者をして感ぜしむるをば近時往々遭遇することである。場所を辨へず歴史を顧みないものはと淺猿しいものはない。社會の各方面に注意して觀察すれば此様な遺憾は少くない。いふことを好ましく思はないが、必要

あるを認むるから、社會に於ける趣味涵養の章で
今少しく述ぶることしやう。

其六 別荘の事

近時、身分あり資力豊なる人々は、静閑なる地
域、風致ある地方に、社會の劇務から暫し退いて
休息し自適すべく、別荘を建築するを益々盛に
なつて、骨て閑静な土地も雜閑になり曩に風致に
富んだ土地も殺風景になつたにつれて、益々他の
静閑幽邃の地域に翫食しつゝある。此等の人々の
趣味深き苦心の建築をして、嘗に其人々の休息自
適に應ぜしむるに止めず、直接には些の關係を有
せざる其地の住民をして此建築に依り従前風致あ
りし其里に更に趣味ある一亭を生じたるが如き感
想を以て朝夕觀望せしむるやうにあらしめたい。
斯の如くに於て、彼の素養なく美趣味なき、自身
の金で自身の爲に建つること故誰にも參酌なしと
いふ態度なる今分限者などが、押強くも専門技師
の設計をさへ顧みず、思ひ付き次第に伐り開き埋
め崩し建て並べて之が爲にいたく從來の風致を損
ぜしめし近頃の弊風を、漸次に救濟したいもので

ある。

